

まえがき

大手前大学比較文化研究叢書の第八巻『比較詩学と文化の翻訳』は、二〇一一年一月、大手前大学のメデイアライブラリーCELILで開かれた国際シンポジウム“Translating/Comparing Poetry”の発表原稿をもとにしている。いま目次を見返しても、これだけのメンバーが本学夙川キャンパスに顔をそろえたとは、なかば信じられないような思いである。

もともとのきっかけは、私が二〇一二年三月末をもって学長の務めを終え、あわせて交流文化研究所長を退任するのを機に、詩と翻訳を主なテーマとする国際シンポジウムを開こうと、次期所長の上垣外憲一教授と所員の森道子教授が企画してくださったことにある。そして、私としてもこれが大手前大学での最後のシンポジウムなので、これまで長年かかわってきた国際比較文学会の友人たちを中心に招きたいと提案した。

会議の副題を「アール・マイナー記念」[To Honor Earl Miner]としたのは、一九九一年、国際比較文学会の世界大会が、アジアで初めて東京の青山学院大学で開かれたとき、会長として日本側組織委員会のわれわれ（芳賀徹委員長）に、この上なく熱い友情と気配りを示してくださったのが、プリンストン大学のマイナー教授だったからである。日本の会員の多くは、今もマイナーさんに深い敬愛の念を抱いている。その上、マイナーさんは一九六〇年から翌年にかけて、フルブライト派遣講師として大阪大学で教鞭をとられたが、森さんはその時の愛弟子である。

現・国際比較文学会会長のステイーヴン・ソンドラップ教授（ブリガム・ヤング大学）、もと副会長の孟華教授（北京大学）、二〇〇四年香港大会組織委員長ユージーン・オーヤン教授（インディアナ大学）ほか、米・中・韓・日の錚々たる研究者、親しい友人たちが、こころよく招きに応じてくださった。

英語・フランス語・中国語・日本語が入り乱れる文字どおりの国際学会だったが、本書に収めるに当たって、原稿はすべて日本語に統一した。

参加者の皆さん、会議の設営・進行に力を貸してくださいました皆さん、なかでも交流文化研究所担当の田中まり子さん、また、これまで編集者としてこの叢書をしつかり支えてくださった思文閣出版の那須木綿子さんに、心からお礼を申し上げます。

二〇一二年三月

大手前大学学長 川本 皓嗣

序章

(川本玲子訳)

第一部 比較詩学

あやめも知らぬ——同音異義の詩学に向けて

- 一 はじめに 11
- 二 序詞と主部の関係 (一) 14
- 三 序詞と主部の関係 (二) 18
- 四 同音異義性の誇示 (一) 21
- 五 同音異義性の誇示 (二) 23
- 六 「同音は同義」 27
- 七 曖昧な親近性 30
- むすび 32

不忠な美人 (Belle infidèle)

——ジュディット・ゴーチエの漢詩「翻訳」に関する一詩論——

漢俳三十年

- 一 はじめに 64
- 二 漢俳の誕生 65
- 三 口語漢俳の試み 71
- 四 漢俳の未来 80

穆木天の前期詩論における日本の影響

- 一 はじめに 88
- 二 大学時代における象徴主義世界への傾倒 89
- 三 「フランス文学の特質」と「純粹詩歌」 94

翻訳はいかに骨折するか、あるいは骨折をどう翻訳するか

——日本詩歌・藝術の非線状的説話構造の欧米言語における受容をめぐる設問——

- 一 はじめに——翻訳における「骨折」—— 102
- 二 翻訳学の盲点・問題の所在 106
- 三 翻訳という「みえざる骨折」 110
- 四 俳諧とエピグラム 112
- 五 水の音と意味の「切れ」 116
- 六 俳諧の不完全性と完全性 120

- 七 「切れ」が繋ぐ世界 123
 - 八 「骨折」による意味の飛躍あるいは精神的な啓示? 126
 - 九 文化伝播における「骨折」の研究——レヴィ・ストロースに抗して—— 129
 - 一〇 異化の臨海——翻訳による「骨折」は意味の飛躍と精神の啓示を約束するのか? 131
- Limit of *Verfremdung* — Fracture: a leap of meaning or a spiritual revelation? —

沖縄民謡「ていんさぐぬ花」と「アルカーデルトのアヴェマリア」

上垣外憲一 136

——聖なる歌詞と俗なる歌詞——

- 一 はじめに 136
 - 二 沖縄の社会・文化史と「六論衍義」 137
 - 三 沖縄民謡「ていんさぐぬ花」の歌詞 139
 - 四 俗なる歌詞から聖なる歌詞への「替え歌」 143
 - 五 「ていんさぐぬ花」の原歌詞の復元 150
- おわりに 153

比較関連におけるノルディック・ケニング

ステイーヴン・ソンドラップ
(森 道子訳)

157

第二部 文化の翻訳

インターカルチャー——すばらしい新世界——

ユージーン・オーヤン
(山中由里子訳)

175

- 一 はじめに 175
- 二 「文化」とは 177
- 三 「異文化間的」——インターカルチュラルとは—— 183
- 四 「異文化内在的」——イントラカルチュラルとは—— 188

仏教のジェンダー平等思想——インド・中国・日本の比較——

植木雅俊 202

- 一 はじめに 202
- 二 フェミニストからの仏教批判 203
- 三 インド仏教史の概略 206
- 四 原始仏典における女性観 207
- 五 ヒンドゥー社会の女性蔑視 211
- 六 小乗仏教における女性の地位低下 213
- 七 女性の出家に際する「八つの条件」への疑問 216
- 八 大乘仏教における女性の地位の回復 219
- 九 比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷から善男子・善女人へ 222
- 一〇 空の論理と性差 224
- 一一 インド仏教のまとめ 228
- 一二 中国・日本の受け止め方 229

東アジア獅子舞の系譜

李 応寿 231

- 一 はじめに 231
 - 二 日韓にまたがる五色獅子 232
 - 三 玄界灘を渡った五色獅子 236
 - 四 韓国の五色獅子の歴史 240
 - 五 中国の五色とネパールの五色 243
- おわりに 245

涙壺を求めて——ヨーロッパの聖書の東洋観とシリア派儀礼——

山中由里子 249

- 一 はじめに——モノと語り—— 249
 - 二 ヨーロッパにおける涙壺 253
 - 三 「私の涙をあなたの瓶に入れてください」 256
 - 四 シリア派儀礼に聖書の古代観 257
 - 五 ペルシア語文献にみる涙壺 260
- おわりに 264

あとがき

上垣外憲一 270

比較詩学と文化の翻訳

序章

ステイヴン・ソンドラップ

學術の場で行われる追悼と祝賀の営みは、多くの共通点を持っています。そのどちらにも、しばしばその専門領域の方向性を変えるほど大きな貢献をした同僚たちに、感謝をこめた賛辞を贈るものだからです。前者の場合、人々はすでに完了した仕事を振り返り、また後者の場合は、同じく過去の業績を顧みながらも、これから世に出るはずの、さらに重要な仕事を期待して、現在を見つめています。二〇一一年一月一八・一九日に大手前大学で開かれた国際シンポジウムでは、アール・マイナー氏を追悼し、川本皓嗣氏に感謝と祝辞を述べるために、世界各地から学者が集まりました。二人は比較文学という研究分野における双壁であり、個々に卓越した業績を挙げるとともに、力を合わせてこの学問の対象領域をひろげ、分析の手法を磨き上げることに大きな貢献を果たしました。

アール・マイナー氏の学術的貢献は、一七世紀英文学についての盛名高く多岐にわたる研究と、国際的視点から見た日本の文学史に関する、やはり著名な研究の二つに分けられます。彼の業績は一九五六年に出版されたドライデン詩選集の編集に始まり、すぐ後にロバート・H・ブラウワーとの共著——よく引用される先駆的な研究

書『Japanese Court Poetry』が続きます。文学者としての彼のキャリアは四〇年にわたり、その間、ドライデンや英

国王政復古期、文学類型論、そして多大な影響を及ぼした『Comparative Poetics (東西比較文学研究)』を代表とする、比較文学理論に関する数々の著書が世に出ました。これらのほかにも、日本文学に関する包括的な研究を行い、日本の学界で長らく優位を占めてきた内向きで伝統主義的な見解とは対照的な、国際的かつ比較的なアプローチを常に用いました(たとえば『Naming Properties: Nominal Reference in Travel Writings by Bashō and Sora, Johnson and Boswell』はその好例です)。日本文学の国際化を促すこのようなアプローチのおかげで、日本のみならずすべての東アジアの文学が、西洋の学術研究、なかでも国際比較文学会(ICLA)の活動の領野に導き入れられることとなりました。マイナー氏は、プリンストン大学教授として英文学・比較文学科に在籍していた頃、三年間ICLAの会長として指揮を執りました。

川本皓嗣氏もまたICLAの会長を務め、伝統的な基準に基づく日本文学の解釈と、比較文化的・国際的観点に基づくそれを仲介する、雄弁な声であり続けています。日本の文化的伝統に関する深い洞察に満ちた研究を行いながら、彼は何より日本文学と英・仏の文学との間の複雑な関係を明らかにすることに精力を傾けてきました。彼のもっとも重要な、そして広く称賛された著書のうち、『The Poetics of Japanese Verse: Imagery, Structure, Meter (日本詩歌の伝統——七と五の詩学)』は、日本語と英語の両方で出版されています。この本は、多くの研究者だけでなく一般の読者にも、俳句のきめ細やかさや表現の豊かさに関する、より深い理解をもたらしました。とりわけ、俳句とは何か、そして何ではないかを、英語圏の読者にはつきり解き明かしてくれました。

同氏は、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻の主任教授としての輝かしいキャリアを経て、大手前大学の学長に就任しました。本シンポジウムは、氏の学長職からの引退を祝うと同時に、(これはもっとも学術的に卓越した業績を持つ研究者に与えられる特別な栄誉なのですが)氏が日本学士院会員に選定されたことを称揚するも

のです。特筆すべきことに、氏は比較文学者としては初めて、この名誉を手にする学者となりました。

これら著名で学識豊かなお二人のために、アジア中から、そして世界中から学者が大手前大学に参集し、『Translating/Comparing Poetry』(詩を翻訳/比較する)という、祝われる当人たちの研究対象につながる題目について、活発かつ刺激的な議論を交わしました。これらの発表は幅広いトピックにおよび、比較文学への多様な批評的アプローチを示しました。異なる伝統や背景を持つテキストを比較するものもあれば、文学的な仲介のダイナミクスを検証するものもあり、また、文学の翻訳という常に悩ましい問題を扱うものもあれば、文学と、音楽、舞踊、そして視覚芸術といった他の芸術分野に目を向けたものもありました。この豊かな多様性を支えていたのは、ある信条への一貫した、時には言わずもがなの参加者たちの合意です。その信条とは、芸術的な価値や重要性を持つ作品は、多様な言語や伝統、そして批評的立場を含む広い比較文化的なコンテキストにおいてこそ、もっともよく理解されうることです。

シンポジウムの言語的側面について言えば、何よりも、世界各地からの参加者たちがさまざまな言語で互いに議論を交わすことができたという事実は、学問上の多言語主義が今ではひろく世界に広がっていることのきわめて雄弁な証左です。シンポジウムの公式な使用言語は日本語と英語で、一つの発表を除いたすべてがこれらの言語で行われましたが、例外が通則を証明するとはまさにこのことで、この発表では、中国語詩の仏訳について標準中国語で解説が行われ、それが流暢な同時通訳で日本語に翻訳されました。このシンポジウムが体現したような最高レベルの比較文学は、多言語使用にしっかりと根ざす学問の場であり続けるでしょう。

この研究分野でじっくり育まれてきたそうした特徴は、このシンポジウムがはつきりと示したように、数十年前に比べて、今日ではさらに顕著になっています。翻訳という作業につねに伴う強みや弱点、そしてその成果と

いう問題に、直接的あるいは間接的に取り組んだ発表が多かったのですが、このこと——これはシンポジウムの題目の一つでもあったのですが——が強調してみせたのは、世界中のあらゆるレベルの教育システムにおいて、さまざまな近代言語と古典言語の幅広く徹底した研究が、以前に増してとは言わないまでも、継続的に必要とされているということです。むしろ、多くの国々で幅広く使用され、あるいは少なくとも理解される言語が、そうした研究の対象となるのは勿論のことですが、一方、それほど頻繁に研究されない言語もまた、世界の多くの地域における個人や国民の流動性がかなり強くなった今では、より研究対象となりやすいはずで、この会の全体の構成、テーマの求心性、そして参加者たちの錚々たる顔ぶれが相まって、国際的に発展可能な研究領域としての比較文学の中核的テーマをめぐる、すぐれた発表が相次ぎました。世界の数多くの大学で、時には比較文学研究の弔鐘が鳴らされるとしても、また、それが他の研究方法に道を譲るべきだという主張があったとしても、このシンポジウムは、むしろ比較文学は否定しようのない勢いと活力、そして深い洞察に満ちた学術研究としての可能性を秘め続けていることを、はっきりと示しました。また、比較文学の研究範囲と、その伝統的かつ多様な研究方法の適用性が、いかに幅広いかを証明してみせました。一つの孤立した言語や知的領域の中では、せいぜい部分的にしか理解できないようなテーマの隠れた側面も、テクストの比較論的な位置づけによって、あるいは、ある一連の知識を広く啓発的なコンテクストの中に置きなおすことで得られる詳細な理解によって、明るみに出すことができることを証明してみせました。

このシンポジウムの目的——比較文学のもっとも有能にして博識な研究者の一人を感謝とともに追悼し、またもう一人が、比較文学のもっとも尊敬される現役の担い手の一人として、めざましい榮譽の地位に就いたことを祝う——に照らして見れば、このシンポジウムは、まことにそれにふさわしい敬意の証しといえるでしょう。し

かし、おそらくそれよりもっと大切なのは、二人の業績を顧み、二人の貢献を讃える今回のシンポジウムを振り返ってみれば、この研究分野の知的な価値の永続性を疑うことは誰にもできないはずだということです。

(川本 玲子訳)

昨年(二〇一二年)、一月一八日、一九日の両日大手前大学で開催された、交流文化研究所主催のシンポジウムの報告書が、この本である。このシンポジウムは、故アール・マイナー・プリンス頓大学教授の遺徳を偲ぶという体裁を取っており、それ故に、マイナー教授の専門である比較詩学、そうしてマイナー教授が国際比較文学会に創設した比較文化研究委員会(Committee for Intercultural Studies)にちなんで、比較文化をもう一つの専門として掲げている。

また同時にこのシンポジウムは、大手前大学学長、交流文化研究所長であられた川本皓嗣先生の主催される最後のシンポジウムにもあたり、川本先生と学問の上、国際比較文学会の運営の上で深いお付き合いのあった方々をシンポジウムに招いているのは、川本先生による前書きにも記されているが、多少の説明をここで付け加えておきたい。

まず、国際比較文学会の現職の会長であるステイヴン・ソンドラップ・ブリガムヤング大学教授は、川本先生から三代目あとの会長ということになる。マイナー教授既になく、川本先生の後を継いだ会長、ブラジルのタニア・カルバリヤル教授は、リオデジャネイロ大会を目前にして在任中に逝去され、ということをお考え、川本先生が今もお元気に学術、行政両面で活躍を続けられていること自体がめでたいことであり、また驚異とも言えることである。こうした豪華メンバーを擁したこのシンポジウムが、川本先生の研究所所長ご退任を記念すると同時に、川本先生の今後のますますのご活躍の門出を飾るものとなることを確信するものである。

また、香港から参加されたユー・ジーン・オーヤン嶺南大学教授は、川本皓嗣先生が国際比較文学会会長として在任当時の二〇〇三年に開かれた国際比較文学会香港大会の大会組織委員長であり、川本先生とはあらゆる面で協力し、苦勞を共にされた仲である。ことに二〇〇二年に予定されていた香港大会が、SARSのために一年延期になったために、この大会はまことに苦勞の多い大会ともなったのであり、そのことを含めてオーヤン教授にこのシンポジウムに参加していただいたことには深い意義がある。

中国からも、かねてから川本先生とお付き合いの深い、孟華北京大学教授、王曉平天津師範大学教授、王中忱精華大学教授という方々に参加していただけたのも、このシンポジウムの光栄を増すことであった。

韓国から参加された李応寿世宗大学教授も、今や韓国学界の重鎮であるが、川本先生からは弟子とも言え、親しい友とも言える間柄である。日本国内からの、稲賀繁国際日本文化研究センター教授、山中由里子国立民族学博物館教授も、川本先生の東京大学比較文学大学院の後輩、弟子といった間柄にあたる。

川本人脈の幅広さを見せつけたまさしく国際的な顔ぶれが、かくも充実した研究発表を寄稿してくれたことは、皆さんお忙しい立場の方々ばかりであることを思えば、感謝の念に堪えないが、これも川本皓嗣先生の人徳のためものと心からそう言えることがなよりの喜びである。

参加者の国籍も様々、比較詩学と比較文化の両方という盛りだくさんな内容であるが、ひとつひとつを丁寧に読んでいただければ、今後の両部門の研究に示唆することの多い内容の作品ばかりであることが理解されるかと思ふ。どうか読者諸賢のこれを味読、熟読されんことを請い希う次第である。

稲賀 繁美 (いなが・しげみ)

1957年1月26日生。パリ第七大学博士(テキストと文書)。現在、国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授。著書に、『絵画の東方』(名古屋大学出版会、2000)、『伝統工藝再考 京のうちそと』(編、思文閣出版、2007)、『東洋意識』(編、ミネルヴァ書房、2012)など。

*上垣外憲一 (かみがいと・けんいち)

1948年5月3日生。東京大学大学院人文科学比較文学比較文化課程修了。学術博士(比較文学・比較文化)。現在、大手前大学総合文化学部教授。著書に、『古代日本・謎の四世紀』(学生社、2011)、『ハイブリッド日本』(武田ランダムハウスジャパン、2011)、『富士山』(中央公論新社、2009)など。大手前大学比較文化研究叢書6・7の編者。

Eugene Eoyang (ユージーン・オーヤン)

1939年2月8日生。Ph.D. インディアナ大学(比較文学)。インディアナ大学(米国)名誉教授、嶺南東洋大学(香港)名誉教授。著書に、『*The Transparent Eye: Reflections on Translation, Chinese Literature, and Comparative Poetics* (University of Hawaii Press, 1993)、*Two-Way Mirrors: Cross-Cultural Studies in Glocalization*. (Lexington Books, 2007)、*The Promise and Premise of Creativity: Why Comparative Literature Matters* (Continuum International Publishing Group, 2012)など。

植木 雅俊 (うえき・まさとし)

1951年8月11日生。九州大学大学院修士課程(物理学)修了。東洋大学大学院博士後期課程(仏教学)中退。人文科学博士(お茶の水女子大学)。現在、東京工業大学世界文明センター非常勤講師。著書は230頁の参考文献参照。論文に、『Sadāparibhūtaに込められた四つの意味』(『印度学仏教学研究』93号、1998)、『Saddharmapūṇḍarīkaの意味』(『印度学仏教学研究』97号、2000)、『一仏乗と三乗』(『東洋大学大学院紀要』37号、2001)など。

李 応寿 (イ・ウンス)

1954年6月1日生。東京大学大学院比較文学比較文化博士課程修了。現在、世宗大学校日語日文学科教授・韓日芸能研究所所長。著書に、『日本演劇史』上(訳著、図書出版青雨、2001)、『物語式(イヤギ)日本演劇史』(共著、世宗大学校出版部、2011)、論文に、『伎楽の桜井考』(『演劇学論集』紀要47、2008)など。

山中由里子 (やまなか・ゆりこ)

1966年1月27日生。東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退。学術博士(比較文学比較文化)。現在、国立民族学博物館准教授。単著に、『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ——』(名古屋大学出版会、2009)、編著に、『*Arabian Night and Orientalism: Perspectives from East and West* (ed., I. B. Tauris, 2006)など。

翻訳者紹介 (掲載順)

川本 玲子 (かわもと・れいこ)

東京大学大学院人文社会系研究科英語英米文学専攻博士課程単位取得退学。現在、一橋大学准教授。共著に、『ジェンダーから世界を読むⅡ——表象されるアイデンティティー』(明石出版、2008)、論文に、『物語論と『意識の科学』——自閉症の視点から』(FLC言語文化論集『POLYPHONIA』1、2007)、『Crime and Creativity: The Anti-Imagination Novels of Muriel Spark』(*Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 49-1, 2008)など。

陳 凌虹 (ちん・りょうこう)

1979年2月14日生。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了。学術博士(日中演劇交流史、比較文学比較文化)。現在、近畿大学非常勤講師。主な論文に、『中国の早期話劇と日本の新劇——春柳社と民衆戯劇社を中心に』(『大手前大学比較文化研究叢書6 1920年代東アジアの文化交流』思文閣出版、2010)、『中国の新劇と京都——任天知進化団と静間小次郎一派の明治座興行』(『日本研究』第44集、2011)、『新派と文明戯の劇場研究——近代新式劇場の登場とともに』(『早稲田大学演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2011』、2012)など。

森 道子 (もり・みちこ)

1940年8月8日生。大阪大学大学院文学研究科博士課程満期退学。現在、大手前大学教授。共著に、『神、男、そして女——ミルトンの「失樂園」を読む——』(英宝社、1997)、『英国文化の世紀——新帝国の開花——』(研究社、1996)、『「大いなる遺産」——読みと解釈——』(英宝社、1998)など。

大手前大学比較文化研究叢書 8
ひかくしがくぶんかほんやく
比較詩学と文化の翻訳

2012年6月30日 発行

定価：本体2,500円（税別）

編者 川本 皓嗣

上垣外 憲一

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

京都市東山区元町 355

電話 075-751-1781（代表）

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎
製本

© Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1637-6

執筆者紹介（掲載順、*は編者）

*川本 皓嗣（かわもと・こうじ）

1939年10月28日生。東京大学大学院人文科学研究科比較学比較文化専攻博士課程退学。日本学士院会員・東京大学名誉教授・大手前大学学術顧問。著書に、『日本詩歌の伝統 七と五の詩学』（岩波書店、1991）、『アメリカ名詩選』（共著、岩波文庫、1993）、『文学の方法』（共編、東京大学出版会、1996）、『翻訳の方法』（共編、東京大学出版会、1997）、『岩波セミナーブックス75 アメリカの詩を読む』（岩波書店、1998）、『川本皓嗣中国講演録』（北京大学出版社、2010）、最近の著作に、「日本詩歌中的伝統与近代」（蔣春紅訳、『東亞詩学与文化互読 川本皓嗣古稀記念論文集』、中華書局、2009）、テリー・イーグルトン『詩をどう読むか』（翻訳、岩波書店、1991）など。大手前大学比較文化研究叢書3・5・6・7の編者。

Steven P. Sondrup（スティーヴン・ソンドラップ）

ハーバード大学大学院修了。哲学博士（比較文学・19世紀文学）。現在、ブリガムヤング大学教授、国際比較文学会会長。著書に、*Arts and Inspiration: Mormon Perspectives* (Brigham Young University Press, 1980)、*H.C. Andersen: Old Problems and New Readings* (Brigham Young University Press, 2004) など。

孟 華（もう・か）

パリ第四大学大学院博士課程修了。哲学博士（比較文学・中仏文化関係）。現在、北京大学教授、中国比較文学会副会長。著書に、『伏尔泰与孔子（ヴォルテールと孔子）』（中文、新華出版社、1993）、『*Vision de l'Autre: Chine, France*（他者の映像——中国とフランス——）』（仏文、北京大学出版社、2004）など。

王 曉平（おう・ぎょうへい）

1947年8月12日生。中国内蒙古師範大学卒。中国古典文学修士。現在、中国天津師範大学文学院教授。著書に、『近代中日文学交流史稿』（湖南文芸出版社、1987）、『佛典 志怪 物語』（江西人民出版社、1990）、『日本中国学述聞』（中華書局、2008）など。

王 中忱（おう・ちゅうちん）

1954年7月8日生。大阪外国語大学修士（言語文化学）。現在、中国清華大学人文学院比較文学比較文化専攻教授。著書に、『越界与想象——20世紀中国日本文学比較研究論集』（中国社会科学出版社、2001）、論文に、「東洋学言説、大陸探検記とモダニズム詩の空間表現——安西冬衛の地政学的な眼差しを中心に——」（『帝國主義と文学』研文出版、2010）、「北川冬彦の植民地体験と詩法の実験」（『近現代詩の可能性』（第八回日本文学国際会議論文集）フェリス学院大学、2011）など。